

# 月信遺跡

県営畠地帯総合整備事業普通寺西部地区  
碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年9月

月信遺跡発掘調査団

## 刊行にあたって

この報告書は、善通寺市教育委員会内に事務局を置く月信遺跡発掘調査団が、香川県仲多度土地改良事務所の委託を受けて、平成3年8月5日から平成3年9月30日まで実施した県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

善通寺市内ではこれまでにも数多くの古代遺跡が発掘調査され、貴重な文化財が多数発見されております。

これらの報告書を通して埋蔵文化財に対するご理解を深めていただき、今後の学術文化的向上、本市文化財行政に少しでも役立てて参りたいと存じます。

これまで、発掘調査にご協力頂きました地元の皆様をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げ、今後とも一層のご支援とご協力を切にお願い申し上げる次第であります。

平成3年9月30日

月信遺跡発掘調査団長

善通寺市教育長 勝田英樹



## 例　　言

1. 本書は県営畠地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設工事に伴い実施された、月信遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は善通寺市碑殿町字月信において平成3年8月5日から平成3年9月30日まで行い、現場での作業と並行して善通寺市立郷土館において整理作業を実施した。
3. 調査は香川県仲多度土地改良事務所長 藤沢 武 から委託された月信遺跡発掘調査団が実施した。調査団の組織は下記のとおりである。

團　長	善通寺市教育委員会教育長	勝田 英樹
副團長	社会教育課長	饗庭 健
調査員	文化振興室主事	笹川 龍一
調査補助	四国学院大学人文学部	
事務局	善通寺市教育委員会 文化振興室	

4. 本書の執筆は調査担当者である笹川龍一が行い、遺物の実測については四国学院大学学生の協力を得た。
5. 遺構については、SK（土坑）・SP（柱穴）・SD（溝）で表示した。また図中の矢印は全て磁北を示す。
6. 本文中の遺物実測図と図版に示す番号は一致する。
7. 本文中、及び図版で紹介した石剣は池田富三郎氏の御好意により掲載させて頂いた。記して謝意を表したい。

## 目 次

刊行にあたって・例 言・目 次		
第一章	遺跡周辺の地理と歴史 -----	1
第二章	調査に至る過程 -----	6
第三章	調査の概要 -----	8
	各調査区の遺構と遺物 ①第1調査区-----	8
	②第2調査区-----	9～10
	③第3調査区-----	11
	④出土遺物 -----	12
第四章	ま と め -----	15
図 版	-----	16

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺遠景 -----	1	第7図	第3調査区平面図 -----	11
第2図	調査地と周辺の主要遺跡 -----	4	第8図	出土遺物実測図(須恵器) -----	12
第3図	調査地及び調査区配置図 -----	7	第9図	出土遺物実測図①(弥生土器) -----	13
第4図	第1調査区平面図 -----	8	第10図	出土遺物実測図②(弥生土器) -----	14
第5図	第2調査区レベル模式図 -----	9～10	第11図	石剣・輪状石斧実測図 -----	15
第6図	第2調査区平面図 -----	9～10			

## 図 版 目 次

第12図	第1調査区調査着手前風景 -----	17	第21図	出土遺物(須恵器) -----	21
第13図	第1調査区掘削作業風景 -----	17	第22図	出土遺物(弥生土器①) -----	22
第14図	第1調査区完掘状況 -----	18	第23図	出土遺物(弥生土器②) -----	22
第15図	第2調査区調査着手前風景 -----	18	第24図	出土遺物(石鐵①) -----	23
第16図	第2調査区掘削作業風景 -----	19	第25図	出土遺物(石鐵②) -----	23
第17図	第2調査区完掘状況 -----	19	第26図	出土遺物(石鐵・錐) -----	24
第18図	第3調査区発掘作業風景 -----	20	第27図	出土遺物(石器類) -----	24
第19図	第3調査区第1遺構面検出状況 -----	20	第28図	出土遺物(敲石片他) -----	25
第20図	第3調査区第2遺構面検出状況 -----	21	第29図	出土遺物(石剣・環状石斧) -----	25

## 第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、總本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角洲などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が龍をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図 調査地周辺遠景（天霧山全景・矢印が月信遺跡）南から

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小兒壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られていた。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村庵寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出されている。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘

調査が実施されたが、ここでは約1500m<sup>2</sup>の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居跡・小児壇棺墓15基・無数の柱穴と土坑群・古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多數の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壇棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居跡や小児壇棺墓・箱式石棺等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。ここから北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍2口・細形銅劍5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅劍5口・銅鉢1口、北原シンネバエ遺跡で銅鉢1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

古墳時代に入てもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず積石塚としては、大麻山経塚、大麻山椀貸塚、丸山1号・2号墳、野田院古墳、御忌林古墳、大塹ケルンなどが知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方部盛り土後円部積石塚である。有岡地区には、同一系譜上の首長墓群と考えられる6基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて磨臼山古墳・鶴ガ峰4号墳・丸山古墳・王



- |            |            |             |           |
|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 月信遺跡調査区 | 7. 旧練兵場遺跡群 | 8. 吉田八幡神社古墳 | 14. 王墓山古墳 |
| 2. 三井遺跡    | ① 被ノ宗遺跡    | 9. 青龍古墳     | 15. 菊冢古墳  |
| 3. 甲山北遺跡   | ② 普通寺西遺跡   | 10. 大塚池古墳   | 16. 北原古墳  |
| 4. 稲木遺跡    | ③ 仙遊遺跡     | 11. 野寺院古墳   | 17. 宮ガ尾古墳 |
| 5. 石川遺跡    | ④ 仲村廃寺     | 12. 鶴ガ峰4号墳  | 18. 天霧城跡  |
| 6. 九頭神遺跡   | ⑤ 善通寺伽藍    | 13. 丸山古墳    | 19. 仲村城跡  |

第2図 調査地と周辺の主要遺跡

墓山古墳・菊塚・北原古墳の順に並んでいる。古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

また、五岳山北側の吉原地区にも二重の濠を持つ青龍古墳や巨石古墳である大塚池古墳が残されており、有岡地区に古墳群を築いた勢力との関係が注目される。

古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が地域を代表する権力者として生まれ変わり、この様に数多くの古墳を築いたが、この権力者（豪族）層は、奈良時代には貴族層となる。この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓ではないかという見方がある。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺（伝導寺跡）が旧練兵場遺跡の一角に建立されている。しかしながらこの寺は間もなく焼失してしまい、その際に500m程南に移転されたものが現在の善通寺ではないかと考えられている。そして古代文化の中核であったこの地は門前町として繁栄を続け、現在に至っている。

#### 参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸龜市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	九頭神遺跡発掘調査団	1988年3月
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月

## 第二章 調査に至る過程

前章で述べたように古代から連綿と文化が栄え続けて来た善通寺市ではあるが、現代に至っての社会経済圏の発展には目覚ましいものがある。まず最初の段階は明治29年の第11師団の設置に伴うものであり、この時門前町に軍都の性格を帯びる様になったが、道路・鉄道網の整備が行われたため、当時の善通寺町は昭和29年3月に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併し市制が施行され善通寺市が誕生している。

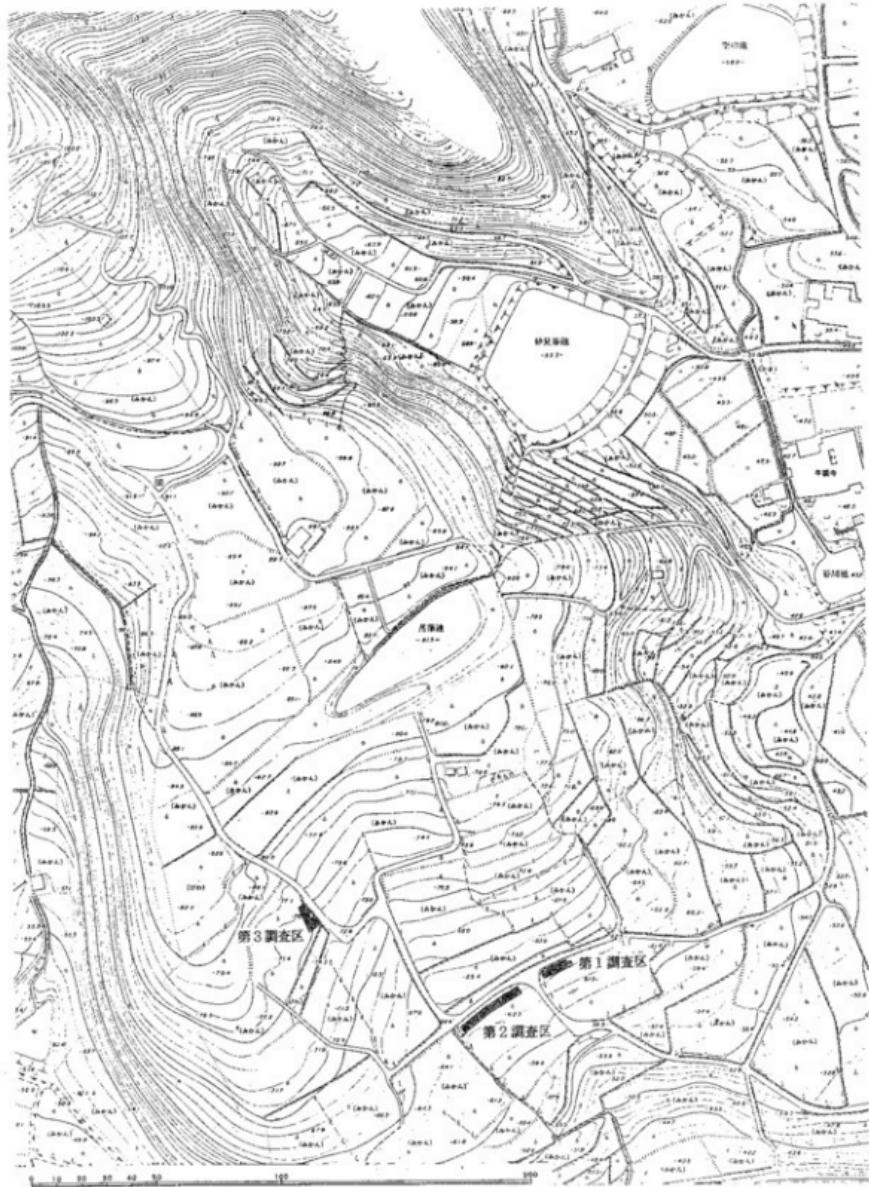
更に昭和62年12月16日に四国横断自動車道路（善通寺～豊浜間）が開通し、昭和63年4月10日に瀬戸大橋が機能し始めてからは、市内にインターチェンジが設置されたこともあり善通寺市周辺は交通量が著しく増加し、閑静な田園都市善通寺市も従来の地域生活改変の時期を迎えた。そして、これに対応するため都市間幹線道路や都市計画道路の建設工事が急がれ、これに伴うは場整備や農道整備等農業基盤整備事業も多く計画されているが、前章で述べたように、市内には随所に古代遺跡が濃密に分布しており、計画年度に併せた予備調査が急増する傾向にある。

そうした中、善通寺市北西部に所在する天霧山南麓部において、県営畠地帯総合整備事業・善通寺西部地区碑殿農道が建設されることとなった。当該地は小さな谷部に挟まれた平坦な尾根上にあり、大部分が蜜柑畑として開墾されているが、この尾根では開墾に伴い数多くの遺物が採取されている。その多くは弥生時代中期頃の土器や石器類であり、中には環状石斧や石劍など希少な資料も含まれる。また、奈良時代前後の須恵器片を始め藏骨器の他、中近世の遺物も多数出土している場所である。

また、当該調査区に近接する南東下方では昭和59年から昭和61年にかけて四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施され、矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡で弥生時代中期頃の掘建柱建物跡・竪穴住居跡群をはじめ、中世頃にかけての建物跡が確認され、大量の遺物等も発見されている。

従って、当該地に重要な埋蔵文化財が包蔵されている可能性は周辺の遺跡の状況や当該地の地形、遺物の散布状況等から極めて高いと推定されたため、香川県教育委員会では香川県仲多度土地改良事務所等と事前協議し、平成2年9月21日から10月3日にかけて香川県教育委員会文化行政課による試掘調査が実施された。調査対象範囲は、農道建設予定範囲のうち現道部分を除いた範囲合計21箇所に幅1m前後のトレンチ(64m<sup>2</sup>)を設定し、確認調査を実施したが、数箇所で遺構と遺物が確認されたため、農道建設事業に際しては部分的に適切な保護措置を取る必要があると判断され、遺跡名も月信遺跡とされた。

そこで、香川県教育委員会・香川県仲多度土地改良事務所・善通寺市教育委員会で協議した結果、善通寺市教育委員会が月信遺跡発掘調査団を編成し、埋蔵文化財発掘調査業務を受託することとなった。



第3図 調査地及び調査区配置図

### 第三章 調査の概要

調査は香川県教育委員会文化行政課の試掘調査結果を受け、遺構の残る可能性が高く、調査面積が広く確保しやすい場所を第1～第3調査区まで3箇所設定し、調査区は必要に応じて工事対象区内で拡張することとした。

当該調査区はいずれも蜜柑畑であり、スプリンクラー等の施設が埋設されていたため、関係機関・地権者等との調整後に、施工業者の協力を得て工事対象範囲の樹木を伐採し調査を開始した。

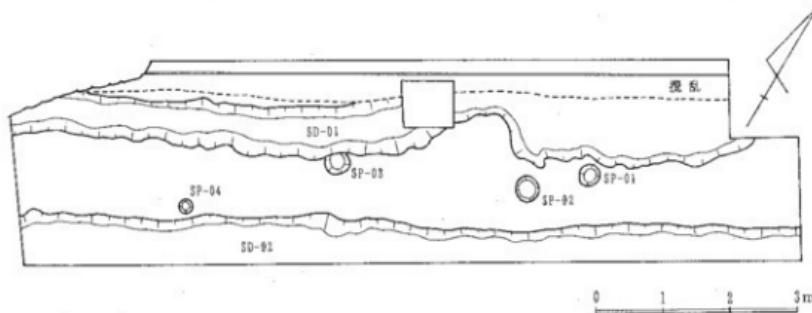
初期掘削は試掘調査により掘削深が把握されていたため、遺構面直上までの耕作土・攢乱土等を重機により除去し、その後人力による遺構面の検出作業を、第1調査区から順に実施した。

以下、検出された遺構と出土した遺物を調査区ごとに解説する。

#### ① 第1調査区

第1調査区では地表面から約20cmの表土(耕作土層)を除去すると、部分的に褐色に変色した乳灰色の凝灰岩の岩盤が露出し、この面で多数の遺構が確認された。

遺構は狭長な調査区に沿った溝状のものと複数の柱穴であるが、埋土は上部の耕作土と同一であり、近現代のガラス瓶片や陶磁器片が含まれていた。隣接する蜜柑畑の地権によると以前は住宅地であったということであり、周辺と比較して遺物の散布状況が極めて希薄であることなどから、造成等による削平で旧地形がかなり損なわれているものと推定される。



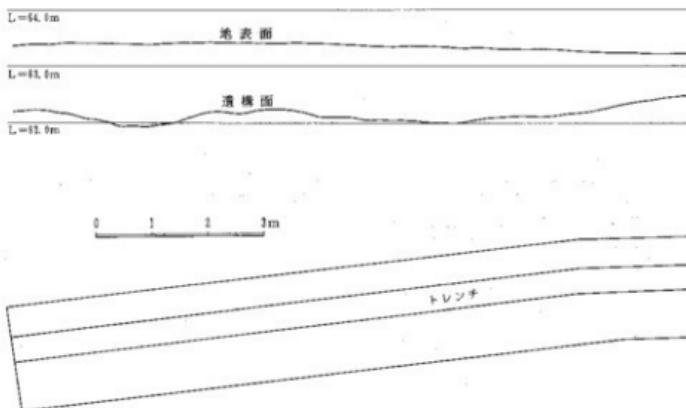
第4図 第1調査区平面図

## ② 第2調査区

第2調査区は現道を挟み第1調査区と接しているため、東側では第1調査区と同様に、地表面から約20cmの表土(耕作土層)を除去すると部分的に褐色に変色した乳灰色の凝灰岩の岩盤が露出した。しかしながら遺物の散布状況は第1調査区とは異なり、極めて多量の遺物が採取されており、地形も平坦であることから、何らかの遺構が遺存することが期待された。表探された遺物の内容は弥生中期頃の土器片・石器・サヌカイト片・敲石片(水晶・チャート)及び、7~9世紀頃の須恵器片・土師器片等である。

露出した岩盤は調査区東端から中央部にかけて緩やかに下るが、第1調査区と同様に遺構は殆ど確認出来てはいない。ただ、調査区中央部の平坦部では複雑な溝状の遺構が検出された。この溝状遺構からは水晶製の敲石片が2点出土しただけであり、時期・性格等は不明である。

遺構面は調査区中央部を境に西側に向かって起伏しながら急に下るようであり、かなり掘削する必要があると判断されたため、調査区が現道と隣接していることも考慮し、安全のため重機による幅50cm程のトレンチを設定したところ、調査区西端では地表面1.4~



1.5 m程でようやく岩盤が露出した。

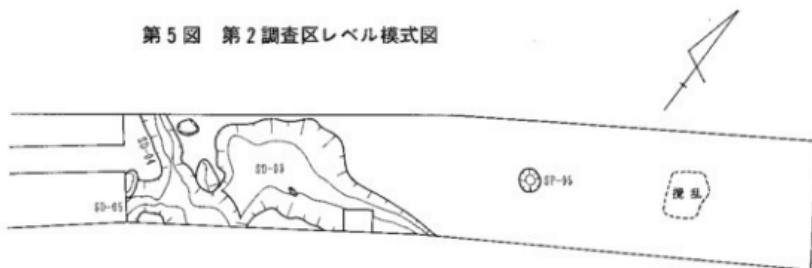
この傾斜部分を埋める黒褐色土層は厚く堆積しているにもかかわらず、層序は全く認められない。また弥生時代中期頃の土器・石器と共にわずかに須恵器片が包含されており、古墳時代以降に人為的に埋められた可能性が高いと推定される。

第1調査区の調査結果と併せて考えると、第2調査区の遺構面の起伏は、東側では掘平されてしまってはいるものの、中央部から西側の起伏はこの調査区の旧地形を示しているものと考えられた。つまり、第1調査区から第2調査区東側の当初の地形は現地形よりもかなり高く、第2調査区西側は谷状地形であったものが、平坦な土地を得るために、過去に大規模な造成工事が行われ、高い部分を削り、低い谷部を埋める作業が行われたものと推定される。

その時期等については不明であるが、第1調査区の遺構は遺物と共に削り取られ、第2調査区の西側の谷部に運ばれたため、第1調査区に散布する遺物が非常に少なく、逆に第2調査区には極めて多いものと推定される。



第5図 第2調査区レベル模式図



第6図 第2調査区平面図

### ③ 第3調査区

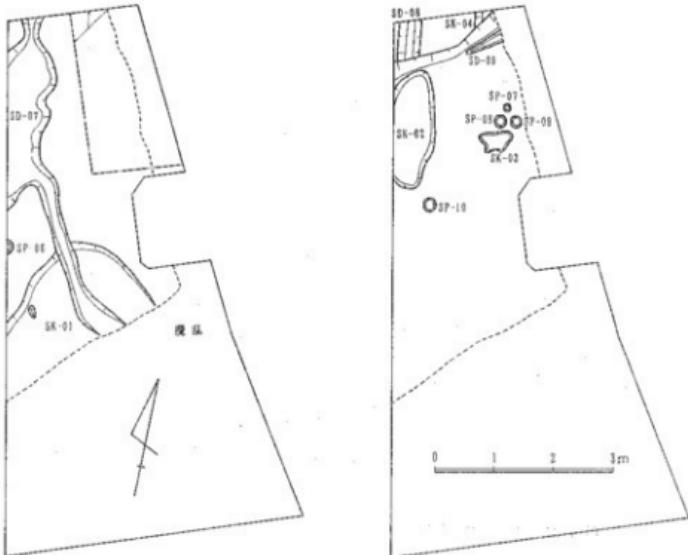
第3調査区付近は過去(近世末頃)に水田として開墾されていたため、現地形も段階状になっているが、調査区は宅地であったということであり周辺より一段高く、弥生土器片やサヌカイト片・須恵器片に加えて、多量の近世陶磁器片が散布している。

また、重機による掘削を実施したところ、厚く堆積した擾乱土中から多くの近世陶磁器片が出土している。そして遺構面は地表面から約1m程の掘削でようやく露出した。遺構面は暗灰褐色土層上に遺存していたが、調査区南半分は擾乱されている。

この遺構面には中世頃の所産と思われる土器片が出土した土坑(SK-01)、近世陶磁器が出土した不定型の溝状遺構(SD-07)が確認されたが、擾乱されていた調査区北東隅を掘り下げたところ、約25~35cm下層で第2遺構面が確認されたため、第1遺構面の調査後、第2遺構面の検出を実施した。この際、暗灰褐色土層中からは弥生土器片・磨製石斧片・サヌカイト片・須恵器片等が出土している。

第2遺構面は調査区北端に平坦面を持つが、ここから南側は50cm程の段落ちとなり、広い平坦部が広がる。この平坦面には南北に2m・東西に75~80cm程の浅い土坑(SK-02)の他、溝や不定型の浅い崖みが複数確認された。SK-02の埋土から須恵器の細片が数点出土しているが、他の遺構と共に性格や時期等は不明である。

第1遺構面は標高74.2m前後に、第2遺構面は標高73.8m前後に遺存している。



第7図 第3調査区平面図

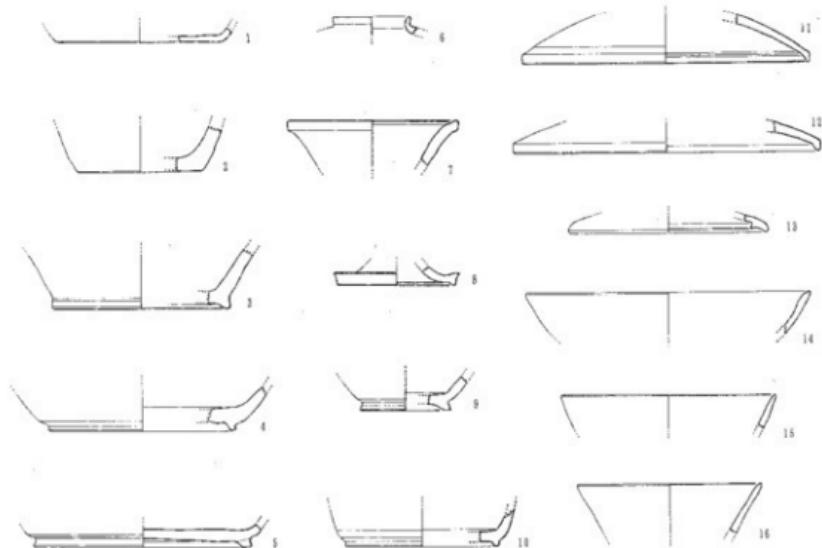
#### ④ 出土遺物

月信遺跡の発掘調査で確認された遺物は大半が地表面で採取されたものであり、掘削に伴い出土した資料は極めて少ない。しかしながら、表掲資料の数は弥生土器片だけでも約二千点を数える。また、サスカイト片に至っては約四千五百点もの資料が得られたが、このうち半数以上のものには調整痕があり、石鎌・石包丁・刀器等の完成品も多く含まれている。

弥生土器は弥生時代中期頃のものばかりであり前期・後期頃のものは認められないが、石器の中に縄文時代の特徴を示すものもあり、この場に更に古い時代の生活があった可能性も考えられる。

また、散布する遺物の中には7～9世紀頃の特徴を示す須恵器の他、中世頃の土器片、近世陶磁器片等も見られるが、弥生時代の資料がほぼ全域に散布しているのに比べて、時代が下るに併せて散布状況がまとまりを示しているようである。

残念なことに長年の開墾等により土器片等は殆どが細片となっており、石器等も破損したものが多いが、このうち時代的特徴の顕著なものを幾つか紹介する。



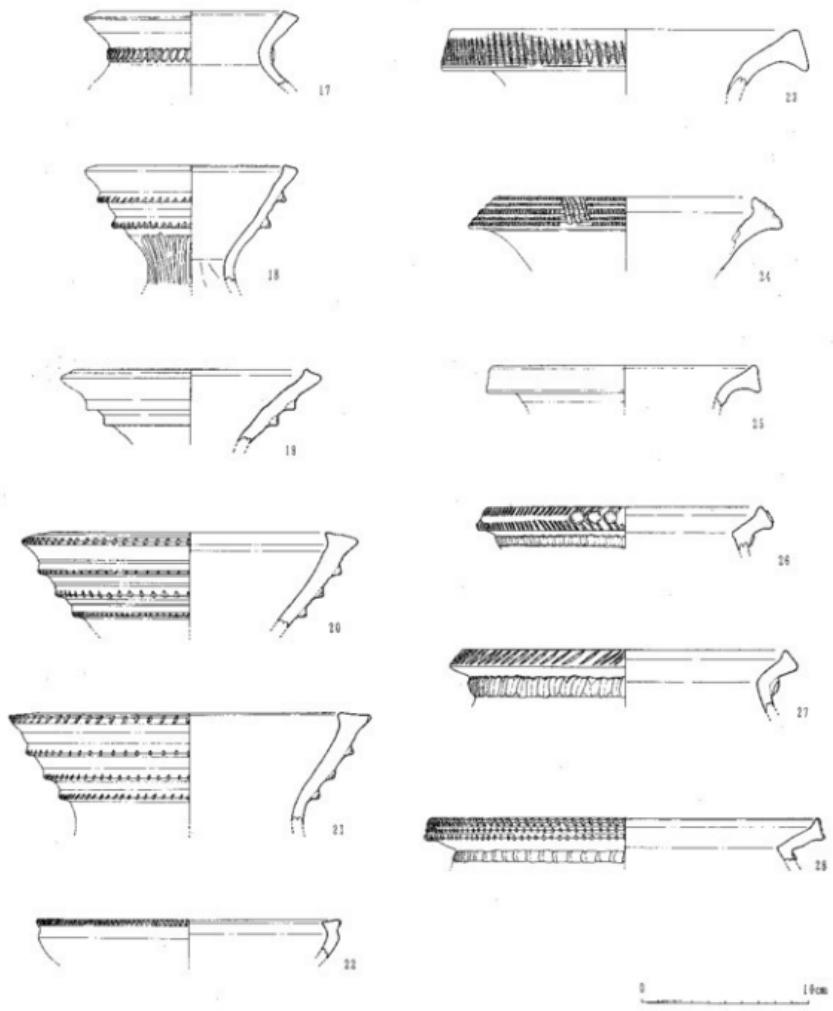
第8図 出土遺物実測図(須恵器)〔遺物の番号は実測図の番号に準ずる〕

第2調査区西側包含層出土遺物 … 6

第2調査区周辺表面採取遺物 … 1, 2, 8, 9, 13, 16

第3調査区周辺表面採取遺物 … 3, 4, 5, 7, 10, 11, 12, 14, 15

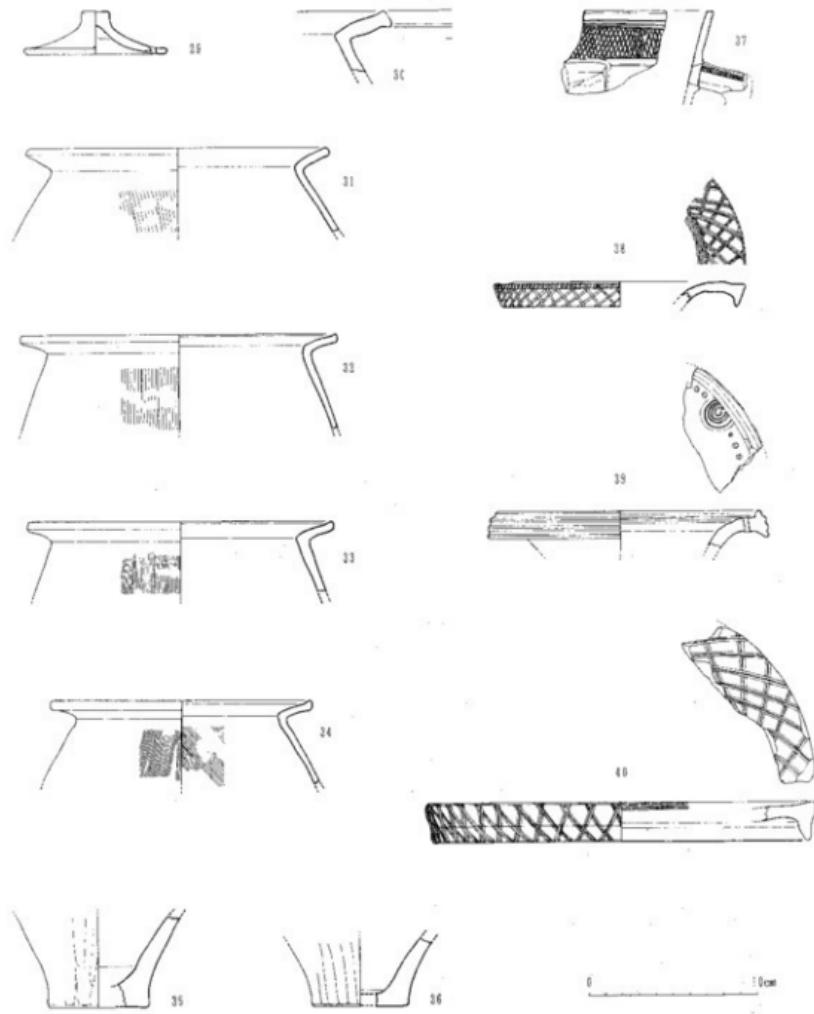
0 10cm



第9図 出土遺物実測図①(弥生土器)

第2調査区西側包含層出土遺物 … 17, 18, 20, 21, 22, 25, 28

第2調査区周辺表面採取遺物 … 19, 23, 24, 26, 27



第10図 出土遺物実測図②(弥生土器)

第2調査区西側包含層出土遺物 … 30, 31, 32, 33, 35, 37, 38

第2調査区周辺表面採取遺物 … 29, 34, 36, 39, 40

## 第四章 まとめ

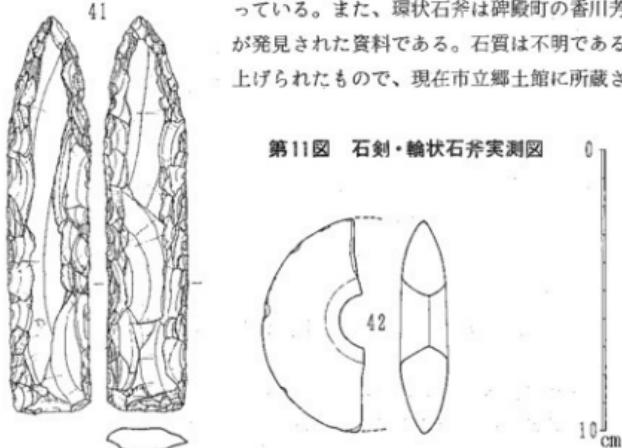
月信遺跡の発掘調査の結果は当初の予想を裏切り、散布する遺物が極めて多い弥生期の遺構を確認することは出来なかった。しかしながら、発掘調査の結果と遺物の散布状況等を見ると遺構が存在していなかった訳ではなく、既に開墾等により消滅してしまったようである。また、今回の調査や、矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡等の調査結果、これまでに採集された遺物(下図参照)等から考えると、生活レベルの高い、数多くの人々の生活があったことが考えられる。ただ、同時期の集落遺跡は平野部にも多く遺存しており、今後こうした遺跡群との関連を考えることが必要になるであろう。

また月信遺跡は第2章で紹介したように、弥生時代以降のはば全時期に亘る遺物が散布している。生活の場としての立地条件が整っていたからであろうが、今回の調査では、更に生活水準の向上を図るために、人々は生活の場の確保のため、耕作面積拡張のために、起伏した土地の上部を削り低い場所を埋め、平坦な土地を作り出すための土地改良事業を行っていたことを示すような痕跡が確認されたようである。こうした事例は平野部の発掘調査でも確認されている。

今回の調査は土地改良に伴うものであったが、その結果に古代の土地改良事業の一幕を見たようである。

月信遺跡の所在する天霧山南麓の斜面からは、これまでにも数多くの遺物が採取されており、中には貴重な資料も多く見られる。このうち石器2点を紹介する。石剣は吉原町在住の池田富三郎氏所蔵のもので先端部が局部磨製となっている。また、環状石斧は碑殿町の香川芳太郎氏(故人)が発見された資料である。石質は不明であるが、丁寧に仕上げられたもので、現在市立郷土館に所蔵されている。

第11図 石剣・輪状石斧実測図



# 図 版



第12図 第1調査区調査着手前風景・南西から



第13図 第1調査区掘削作業風景・南西から



第14図 第1調査区完掘状況・南西から



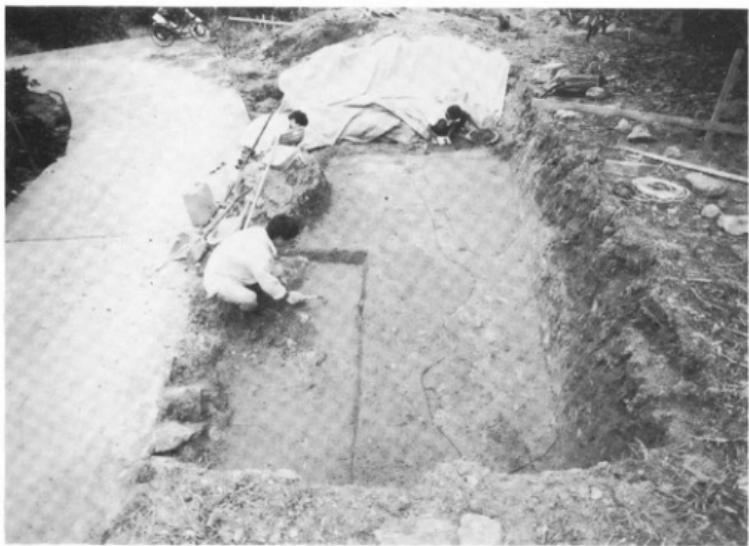
第15図 第2調査区調査着手前風景・北東から



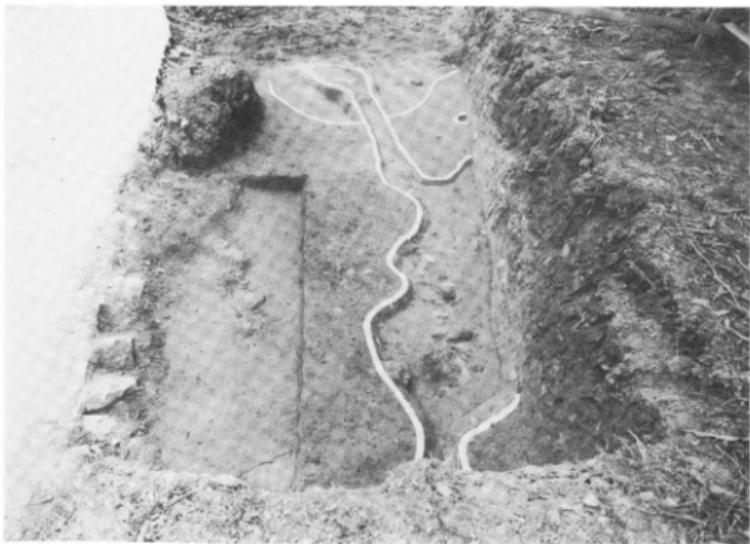
第16図 第2調査区掘削作業風景・南西から



第17図 第2調査区完掘状況・北東から



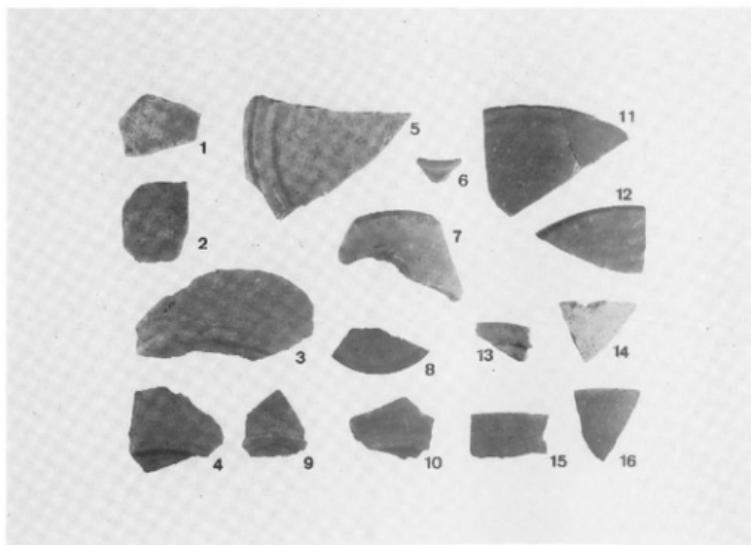
第18図 第3調査区発掘作業風景・北から



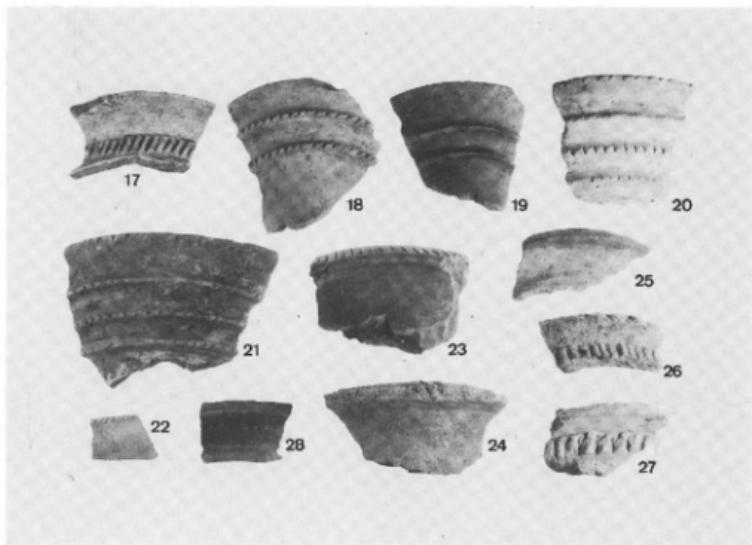
第19図 第3調査区第1遺構面検出状況・北から



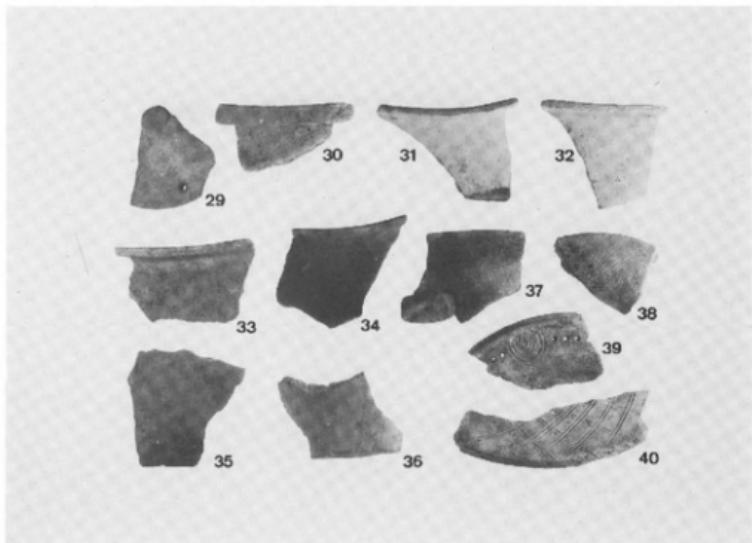
第20図 第3調査区第2遺構面検出状況・北から



第21図 出土遺物(須恵器)



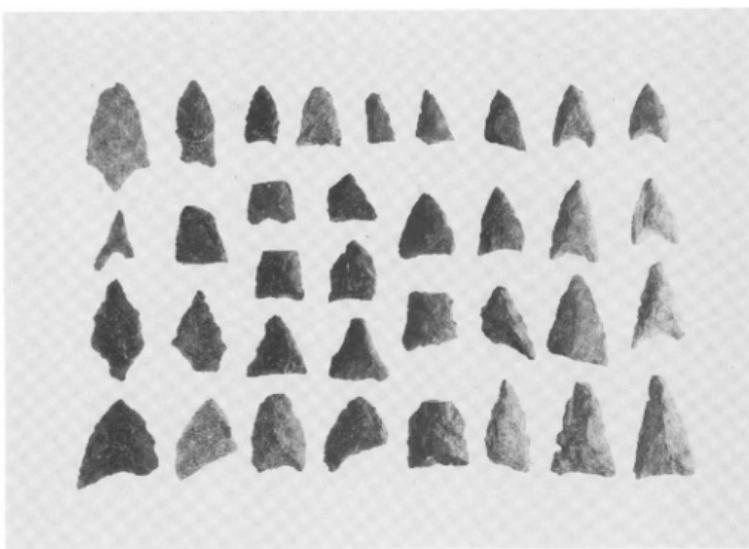
第22図 出土遺物(弥生土器①)



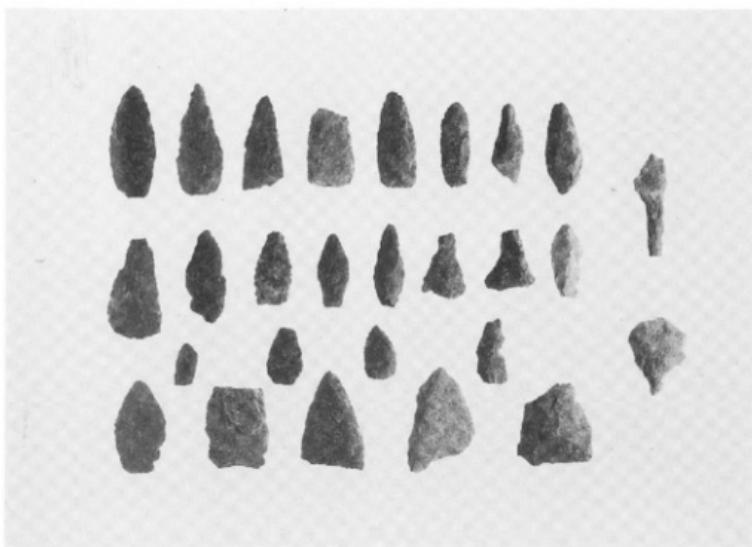
第23図 出土遺物(弥生土器②)



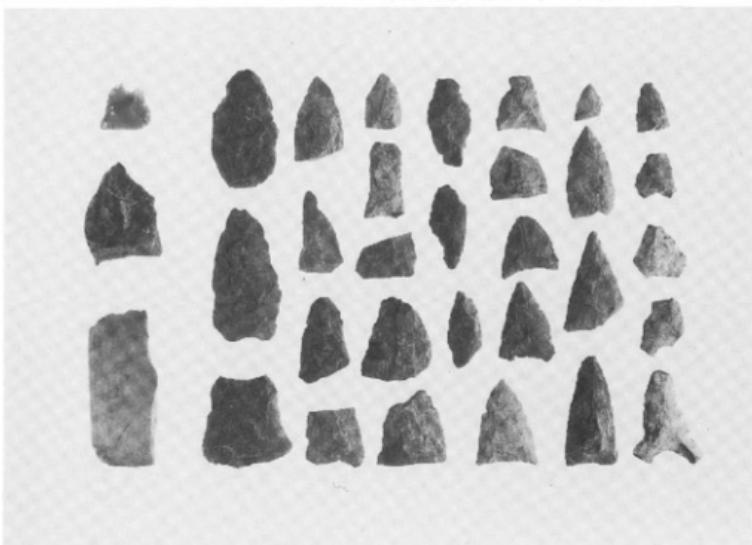
第24図 出土遺物(石鏃①) (第2調査区周辺表面採取遺物)



第25図 出土遺物(石鏃②) (第2調査区周辺表面採取遺物)



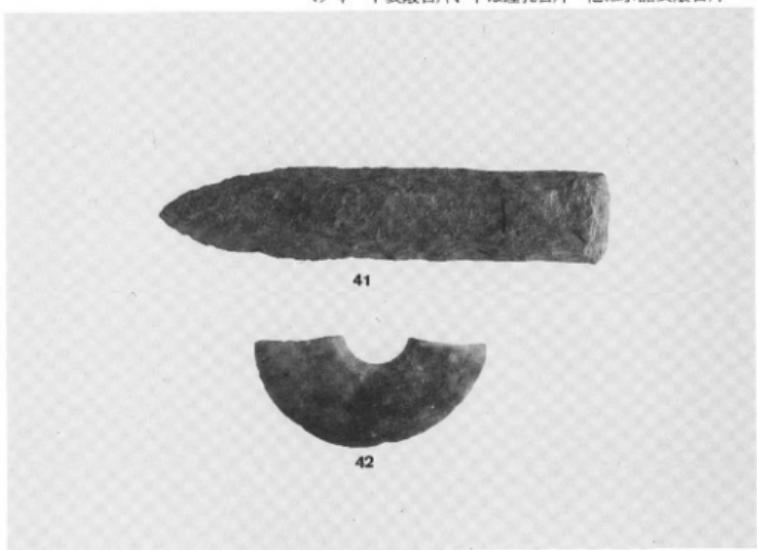
第26図 出土遺物(石鎚・錐) (第2調査区周辺表面採取遺物)  
右端2点は石錐、他は石鎚



第27図 出土遺物(石器類) (第3調査区周辺表面採取遺物)  
左端上2点は敲石、下は扁平片刃石斧



第28図 出土遺物(敲石片他) (第2調査区周辺表面採取遺物:左端2列は黒水晶  
製敲石・左端2列は黒水晶製敲石片・右端上3点は  
チャート製敲石片、下は鍾乳石片・他は水晶製敲石片)



第29図 出土遺物(石劍・環状石斧)

## 月信遺跡

県営畠地帯総合整備事業普通寺西部地区  
碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年9月30日発行

編集 月信遺跡発掘調査団

香川県普通寺市文京町2丁目1番4号

印刷 四国工業写真株式会社